

幼稚園教諭・保育士課程におけるピアノ初心者への指導の取り組み
－読譜力の観点から見た実践報告－

The guidance efforts for piano beginners in the course of preschool
and nursery teachers :

A practice report from the point of view of sight reading force

山本 敬子, 岩田 朋子, 奥野 浩美, 添田 ゆみ
辻 陽子, 橋本 由子, 湊谷 亜由美, 山本 麻代

YAMAMOTO Keiko, IWATA, Tomoko, OKUNO Hiromi, SOEDA Yumi
TUJI Yoko, HASIMOTO Yuko, MINATOYA Ayumi, YAMAMOTO Mayo

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第4号 2019年

【実践報告】

幼稚園教諭・保育士課程におけるピアノ初心者への指導の取り組み
—読譜力の観点から見た実践報告—

The guidance efforts for piano beginners in the course of preschool
and nursery teachers :

A practice report from the point of view of sight reading force

山本敬子* 岩田朋子* 奥野浩美* 添田ゆみ*
辻 陽子* 橋本由子* 湊谷亜由美* 山本麻代**

YAMAMOTO, Keiko* IWATA, Tomoko* OKUNO, Hiromi* SOEDA, Yumi*
TUJI, Yoko* HASIMOTO, Yuko* MINATOYA, Ayumi* YAMAMOTO, Mayo**

キーワード：ピアノ初心者 読譜力

I 研究の目的

幼稚園教諭・保育士養成校で学ぶ学生にとって、ピアノの演奏技能の習得は必要不可欠である。和田垣⁽¹⁾らが2017年に実施した大阪市54園の園長へのアンケートにおいても、学生時代に習得しておくべきピアノ技能について問うたところ、35園の園長が「ブルグミュラー25の練習曲習得レベル」と回答している。17園の園長が「ソナチネ・ソナタ習得レベル」と回答し、2園の園長は「それ以上のレベル」と回答しており、「バイエル習得レベル」と回答した園は0園であった。現場ではかなり高度なピアノ技能を必要としていることがこの結果からわかる。

しかし、「年齢18・19歳以上の人間が、1年から2年間程度の音楽レッスン経験で、幼少期から10年以上の読譜経験者と同レベルでの読譜能力を獲得することは困難である」と筆者の1人である山本⁽²⁾も述べているように、ピアノ初心者の技能を現場が求めているレベルまで高めるには、並々ならぬ教員の工夫と学生の努力、その両方が不可欠であると感じる。「教科器楽基礎」(小・幼選択 保必修)を平成29年度後期に受講した大学1年生・平成30年度前期に受講した短大1年生のうち、大学1年生では145人中61人(約42.1%)、短大1年生では148人中66人(約44.6%)と、ほぼ半数に近い学生がピアノの初心者であった。現在、「教科器楽基礎」では、ピアノの初心者に対して「バイエル」を教則本として使用している。毎週個人レッスンを行っているが、半期で次の段階の弾き歌いの伴奏が弾けるようになるまで力をつけることは、学生にとっても担当教員にとっても容易なことではない。またピアノ初心者が一様に同じようなレベルではなく、全く楽譜の読めない学生、ト音記号のみ読める学生、読譜はできて音符と鍵盤の位置が中々結びつかない学生、打鍵自体に慣れない学生など、それぞれ個人差があり、担当教員はその学生に最もあった指導を模索しつつピアノ技能を伸ばさなければならないのである。本稿では様々なレベルのピアノ初心者に対して、読譜力・運指法・練習法など、様々な観点から、担当教員がどのような工夫を試みその成果がどうであったのかなど、指

* 教育学科非常勤講師

** 応用音楽科非常勤講師

導一端を報告し、それをもとにピアノの初心者指導をより効果的に行うための一助とすることを目的とする。

II 研究の方法

「教科器楽基礎」の授業では、ピアノ経験値のレベルにかかわらず、各個人によって不得手な部分（リズム感・表情付け・指使いなど）が異なるため、画一的にはピアノ指導を進めることができない。担当教員が担当学生に対して、それぞれの不得手な部分を強化していくという方向で指導を行うのである。

本稿では、バイエルピアノ教則本からスタートするピアノ初心者に対する指導法を実践報告する。指導者①～⑦が「教科器楽基礎」で担当した文学部教育学科（以下、大教と省略）1年生（平成29年後期受講）、短期大学部幼児教育学科（以下、短教と省略）1年生（平成30年度前期受講）のうち、何人のピアノ初心者があり、そのレベルと傾向はどのようであったか、また、それぞれ各個人に合わせた指導において、どのような工夫を試み配慮を施したかなど、ピアノ初心者への指導の取り組みの一端を紹介し、考察を試みる。

III 指導の取り組みの紹介

まず、学生が苦手とする項目を取り上げている指導例を紹介する。

実践①

幼稚園教諭、保育士課程におけるピアノ指導で最も重要な目標として“一人で楽譜から音にできること”と考えている。現場に出た時、基本的に指導者の助けを借りずに、比較的短時間で曲を演奏しなければならない状況を想定して、主に読譜力の強化と合理的な練習方法の習得を初心者指導の中心に置いている。2018年度前期担当した短教1年生のピアノ初心者（経験年数1年未満）6名には共通して直面する次の4つの問題があった。

- (1) 音符（音の高低）を読むのが難しい
- (2) リズム（音符の長短）を読み取るのが難しい
- (3) 弾き直しをせずに止まらず弾けない
- (4) ピアノを弾くこと、楽譜に対して初めから難しいことと不安や恐怖心を持ちすぎている

それぞれの問題を解決に近づけるように以下のような指導を行った。

(1) 音符を読みその音を鍵盤の正しい位置を弾くこと

まずト音記号は“一点ト”の位置（第二線）、ヘ音記号は”へ“の位置（第四線）を示すこと、それを基準に覚えることを説明した。指導者が楽譜の中の音符をランダムに指し、その音を学生が素早く弾くという反復も最初の2回程度のレッスンでそれぞれ数分実施した。学生は意欲的で、また音符が読めないことへの危機感も高かったので、大多数は自発的に復習し覚えようと努力した為、比較的早く読めるようになった。

(2) リズムを正しく読み取り表現すること

音符の高低に比べるとこのリズムの理解は容易ではない。

1) 音符の種類、拍子の再確認

高校までの音楽教育で音符については一応習ってはいるものの、実際は曖昧に覚えている者が多く音符の名前、長さ、長さの相関関係を整理して再確認した。拍子についても例えば4分の4は1小節に四分音符が4つ入ることを説明し、自分で楽譜を開き、出てきた曲の拍子について同様に説明させて拍子記号の理解を定着させた。

2) 声に出して数える

頭で理解してもいざ弾くとなると、なかなか指と頭が一致しない。ここでバイエル 48 番を例に付点のリズムの指導例を上げる。この曲は4分の3拍子なので、楽譜の1小節目に四分音符に合わせて「1, 2, 3」と書き込み、さらに八分音符刻みとして「と」を加え「1と2と3と」書く。学生は自分で声に出して「1と2と3と」と数えながら右手だけを弾いてみる。八分音符の「レ」が「2と」の「と」の時に打鍵できるようにする。声に出して数えながら弾くということは非常に難しいが、頭の中で数えるのではなく敢えて声に出すことによって本当に正しいタイミングで「と」と言っている時にその音（レ）が鳴っているか否かが自分自身でわかる。左手、さらに両手も同様に練習する。指導者が横で数えるのではなく自分で数えながら弾けるようになると、一人で練習する時にも正しく弾けているかを確認できるようになるし、これができれば黙ってただ指を動かす事はずっと簡単に感じる。また弾くことと声を出すことを同時に行うことは、次学期以降に学ぶ「弾き歌い」の準備としても有効である。この方法で例えば、バイエル 105 番で頻繁に見られる十六分音符八分音符のリズムの間違ひも簡単に正すことができる。

(3) 弾き直しを減らす為の練習方法

保育園や幼稚園の現場でピアノを演奏する時に重要なことの一つに、“とにかく止まらず終りまで弾き通すこと”がある。バイエルの段階からそれを徹底するため、練習方法を指導した。弾きにくい箇所を自分で見つけてそこだけをピンポイントで繰り返し練習する。例えば、五回連続でその箇所を正しく弾けるまで練習する（四回目で間違えたらもう一度一回目からやり直す）など、具体的な回数を指示するとわかりやすい。実際にこの方法で授業中に一緒に練習し、効果を実感すると自発的に実践しているようだ。往々にして初心者は「曲の途中からは弾けない」ということがあるが、どこからでも弾けるようにすることも必要で、また時間を合理的に使うためにも困難な個所に絞った部分練習の方法を知ることは有益と考える。

(4) ピアノや楽譜に対する不安を軽減させる

バイエルも後半になると複雑な記譜法や曲の長さに、弾く前に怯んでしまう学生も少なくない。そのような時にはできる限り「思うほど大変ではない」ことを伝えて不安を取り除くことも大切と考える。例えばバイエル 78 番（9小節目～）、88 番の伴奏型の左手低音の保持については、まず普通に左5指を上げて弾き、そのまま5の指を長めにのばすだけと伝える。また、バイエルに含まれる多くの曲は A-B-A 形式で作曲されているので、初めのAと同じ部分を自分で探させ、内容は同じだから見た目ほど長くない事ことを実感させると同時に他の曲、童謡でも音楽には繰り返される部分が多いこと、簡単な音楽形式を教え、それが練習時間の合理化につながることも教える。

実践②

ピアノ初心者にとって、5本の指を独立して1本ずつ、しかも違う動きをする左右の手を、同時に動かすことは、大変困難なことである。初回の授業で学生に実施するアンケートには、やる気にあふれた言葉が並ぶ。そんな短教1年生の学生への指導例を挙げてみる。

・鍵盤の上に手を広げることが初めての学生鍵盤の上の、ドレミファソの上に手を丸く、のせるだけで、かなりの時間が必要となる。一生懸命がんばっても、指は言うことを聞かない。最初の課題曲は、右の指は1から、左の指は5から順番に鍵盤を押さえていく。右利きの学生にとって1の指から動かすことは比較的容易であるが、左の指は思うように動かない。左5の指でドを押さえた瞬間、1の指は鍵盤から手前にはみ出す。2の指は上を向く。そこで、一度手を固く握り、丸い形を保てるところまで、ゆっくり広げ、手首を少し高い位置を維持して弾くようにアドバイスすると、指先が上を向くこともなく弾くことが出来た。ほんの少し手の形を変え、指が浮かないように「パンにバターをぬるように、ベターッと弾こう。」と、イメージするように伝えることで、1曲目をクリアすることが出来た。

・楽譜を読むことが出来ない学生（ドレミがわからないと言う学生）

全く楽譜を読むことが出来ないと言う学生も、なぜか「ド」を知っている。1点ハである。線、間、線、間、と数えて何の音かみつけるのだが、ト音記号の場合、第3間の音（2点ハ）や、上第2線の音（3点ハ）の時も、下第1線のドから数えている。きちんと数えられれば良いが、ずれることもしばしばある。そこで、第1間のファ（1点ヘ）、第4間のミ（2点ホ）を覚えるように指導している。ヘ音記号の場合、第2間のド（ハ）を覚えると早いのだが、ト音記号のラの音と間違えることが多いので、第2間のド（ハ）と同時に、第1間のラ（イ）、第4間のソ（ト）を覚えるように指導している。ト音記号は二箇所、ヘ音記号は三箇所をしっかりと覚えることで、楽譜の中に出てくるどの音でも、近い方から上へ、下へと数え、より素早く正確に音を見つけることが出来るようになった。すべての音に「ドレミ・・・」を書いていたが、この方法で、少しずつ書くことを減らすよう、心がけさせた。1曲の中で、同じ音が出てきているのに迷っているときは、楽譜の中の音符を指で平行になぞって戻り、何の音かを確認させ、同じフレーズが出てくるときは、この曲のどこに出てきたフレーズなのか、かたまりでみつけさせ、2回目以降は書かせないように指導した。楽譜の隅々まで「ドレミ・・・」を書き込んでいた学生も、口うるさく私が言い続けることで、少しずつ書くことを減らすようになり、指で数えたり、なぞって戻ることより覚えてしまった方が楽だと言う学生も出てきて、こちらの思惑どおり、練習量が増えることになり、その後の進度も順調に伸びた。

・左手の分散和音が不得意と言う学生

右手のメロディーに合わせて、左手には、よく分散和音が使われている。例えば、Cコードの和音が、ドミソドミソ・・・、ドソミソドソミソ・・・というふうに繰り返して出てくる。この場合、左手の分散和音は、鍵盤に軽く乗せた手の平の中にあるはずで、ポジションもあまり変わらないように、和音も転回型で書かれていることが多い。だが、不得意と言う学生は、小節ごとに、何の音なのかと数える。前の小節と同じ音だと気付くと、その後はスムーズに進むが、気付かない場合、同じ音＝同じ和音なので、○印、△印、□印のグループで分けて書き込み、視覚的にすぐに和音をつかめるように指導した。この方法は、ピアノを初めて弾く学生にとっては左手がどんどん動くようにな

り、また、音符を読むことが不得意な学生にとっては音符を素早く読む練習になり、右手がメロディー、左手が伴奏のピアノ曲を、弾くことが出来るようになる。少し自信をつけて、ピアノを演奏することが出来たという喜びを得ることが出来る。学生が少し得意そうに弾くこの瞬間を見ることができたら、この後難しくなっていく課題の曲も、自らピアノの前に座り、楽譜を広げ、自分ひとりで新しい曲にチャレンジしようと思えるようになっていく。そうなる為に、効果的な指導であった。

実践③

ピアノ初心者の学生を指導するにあたって、まずはト音記号、ヘ音記号や音符の名前の由来、リズムの長さの把握、リズムの取り方などを一通り説明し、ピアノを弾く前に楽譜の読み方をしっかり指導するようにしている。将来、幼稚園教諭、保育士となる学生にとって一番必要なのは子どもたちと一緒に歌う時にピアノで伴奏を簡単に付けられる力だと思い、まずはどの曲も伴奏部分を和音で囲むことに重きを置いて指導している。読譜する際に、音を一音ずつ読むことよりも、左手の伴奏部分が和音でできていてそれらの音を分散させているということに気づくことが、要領よく読譜をするポイントであり、また楽曲の中にある和音の種類に気づくことで、次の「伴奏法と弾き歌い」「アンサンブルと弾き歌い」の授業において学ぶコードネームに結び付きやすくなるのが狙いである。

「教科器楽基礎」の授業において、ピアノ初心者がはじめに取り組む教材のバイエルを用い、ピアノを弾く前にまずは左手の伴奏部分を記号で整理させている。ハ長調の主和音ドミソを○、下属和音ファラドを□、属和音ソシレを△で囲む。(楽譜通りに弾くよりも前に、まずは記号で囲んだ伴奏型を和音で一気に囲んで弾かせ、慣らせてから楽譜通り弾くように取り組ませる。)この記号をつける方法は、調性が変わっても同じようにさせている。どの調性でも必ず主和音は○で、下属和音は□、属和音は△と決めており、調整が変わる度にそれぞれの記号が何の音の和音になるかその都度学生と一緒に確認するようにしている。担当している学生で短教1年生(2017年度後期)9人中5人がバイエルに取り組み、内4人が初心者だったが、授業の最後まで○□△と記号を書き課題に取り組んだのは4人全員であった。

また、大教1年生(2018年前期)20人中15人がバイエルに取り組み(8人が初心者、経験者が2人、他楽器経験者が3人、残り2人は授業と並行してピアノを習いに行き始めた)、授業が始まって2ヶ月経った今でも○□△と記号を書き課題に取り組んでいるのは14人である。記号を書くことによって左手のポジション移動がスムーズになった学生は9人。まだピアノを弾くのは思ったようにスムーズにいかないが、何の記号(和音)を弾くのか頭で理解している学生は5人である。学生によっては同じ記号でも音の並び方(転回型)によって色ペンを使い分けて工夫をして取り組んでいる。中には、これがいずれコードネームに繋がると気づき質問してくる学生もいる。指導者としては将来幼稚園教諭、保育士となった時にコードネームが何の音で構成されているかを瞬時に判断し歌の伴奏をつけられるようになるよう、初めの時点から伴奏型を徹底的に理解してもらいたく、更に次のようにも工夫している。「教科器楽基礎」の授業でバイエルに取り組む学生の課題曲数は、45, 48, 52, 53, 54, 59, 60, 61, 62, 65, 66, 75, 76, 78, 81, 88, 91, 94, 95, 96, 97, 101, 103, 105番の全部で25曲である(そのほかに手ほどき用のプリントに3曲ある)。45~59, 65, 66番は基礎として先に取り組むが、そのあとは順番通り進まずになるべく関連のある曲を連続して取り組ませている。

例えば、59番を終えたら、同じハ長調でアルベルティバスとなっている103番に取り組む。ここでは同じアルベルティバスでも八分音符と十六分音符のとらえ方の違いを学ぶ。それを終えたらまた同じアルベルティバスの94番へ。94番はヘ長調なのでそこで長音階をまじえながら調性の説明をして新たな調性を学ばせる。

ピアノ初心者には少し難易度の高い60番はある程度弾けるようになってから取り組むようにさせているが、これは転調の勉強になる。イ短調→ハ長調→イ短調という構成になっているので、60番を終えたら同じ調構成になっている91番に取り組む。これは長調と短調の響きの違いが分かりやすく、どうやったら明るさや暗さをピアノで表現するかを学ぶことができる。101番は十六分音符でドレミファソファミレと5本の指で連続して速く弾く曲だが、91番もラシドレミミレドシラと五本の指で構成されこの2曲も共通するものがある。違いは調性とテンポなので、ほぼ同時に取り組みテンポの違いや表現よっての指の動かし方の違いも実践させている。

これらのやり方を含めつつ、学生によって得手不得手は違うので、なるべく苦手意識を持たせないよう様子を見ながら取り組む課題の順番を工夫している。どの学生も自分なりに楽譜を記号や色を使って整理し、よく練習をしてピアノに熱心に取り組んでいる。学生がこれらから学んだことを活かせるよう、今後もしっかり指導をしていきたい。

実践④

2017年度後期受講生 大教1年生 初心者11名 短教1年生 初心者1名(再履)

2018年度前期受講生 短教1年生 初心者6名

「初回のレッスン指導」

担当する生徒(1限につき最多5名)の中でピアノ初心者が3名以上いる場合、初回のレッスンは初心者ばかりを集めて合同でレッスンを行い、基本的な知識(左右5本の指にそれぞれ指番号を与えること、中央の「ド」の音の位置、ト音記号・ヘ音記号の5線譜上の位置、教則本「バイエル」～44番に出てくる4分音符や8分音符などの音符の音価など)を全員で確認しながら、交代で必修曲1番を弾いていく。ピアノが2台ある場合は2台それぞれ生徒が使用し、まず、使用する楽譜の旋律を全員で音名で歌い、次に、大変遅いテンポで講師が手拍子をし、2名同時に同じ旋律を弾いてみる。この方法により、一緒に拍子に合わせて、お互いにリズムを体で感じ、音を耳で聴き、確認することを体験する。さらには、1台のピアノに2名座り、連弾形式で同じ旋律を1オクターブ上で弾かせると、お互いの手の動きも間近で見ることができ、2台のピアノを使用した時と同じような効果が見受けられた。自分以外の生徒のレベルや弾き方を間近で見ながら互いに教えあったり、刺激しあいながら、これからのレッスンに不安を抱きがちな初心者の生徒たちの緊張もほぐすように手引する。初回レッスン以降は、同じような課題曲を練習している生徒がいる場合は、できるだけ同席し聴講するようにさせる。その際に必ず楽譜を開いて一緒に課題曲の旋律を歌ったり、膝の上で指を動かし、指使いの確認をするよう促す。次の新しい課題曲をレッスンしている場合でも、耳から曲を覚えることができるチャンスが期待できる。次に、ピアノ初心者のほとんどが直面する演奏、または読譜上の問題とその解決方法を1)～6)項目にまとめてみた。

1) 両手で止まらずに演奏する難しさの克服。 両手で一度に弾こうとして、困難をきたす生徒には、以下の手順で指導すると、非常に遅いテンポではあるが、一回で弾けることがある。

- ① 右手の旋律を音名でリズムや音程を正確に歌う。その時音名が出てこなかった音には生徒自身で音符の上に音名または指番号を記入する。
- ② 右手の旋律を歌いながら指に命令するように確実に動かす。
- ③ 左手の旋律を音名で歌う。①と同様に自信のない音には自分で音名を記入する。
- ④ 左手の旋律を歌いながら鍵盤上の指の配置を見つつ弾いてみる。一回で弾けない場合は間違わなくなるまで続けて反復練習する。
- ⑤ 左手の旋律を弾きながら、右の旋律を音名で歌う。この時のテンポは頭で考える時間を与えるためにさらに遅くする。
- ⑥ 両手で演奏する。テンポは⑤のように両手を確認できる遅さで。この時に右手の旋律を歌いながら弾いてもかまわないが、その後右手の旋律は心の中で歌いながら再度両手で弾くように促す。

上記のように7段階の手順を経て、大変遅いテンポではあるが、確実に間違いなく最後まで演奏することが可能になったら、体に覚えさせるように回数を重ねて反復練習すれば、おのずと適切なテンポでも弾くことが可能になる。この方法は、1曲の中の特定の難所（例えば、右はレガート奏法、左は休符やスタッカート）の習得にも応用できる。

2) 鍵盤上の指のポジションの認識。

親指をひっくり返したり、跳躍をすることで特に親指が鍵盤から離れたり、手が開いてしまって、すべての指を1音ずつ鍵盤の上に置くことを忘れてしまうことがある。これは必要以上の筋肉の緊張から来るもので、ほとんどの生徒は楽譜から目を離すことができず、鍵盤上の自分の手のポジションを目で確認する余裕がないためである。ポジションを認識するためには、例えば、親指をひっくり返したその瞬間、一時停止し、次の旋律を弾く準備ができているか、生徒の目で確かめさせなければならない。

3) 休符を利用したポジションの移動、跳躍。目の動きの訓練。

一つの旋律が終わり、休符の後にポジション移動または跳躍して新たな旋律が始まる場合や、楽譜が次の段へ移行する場合、初心者では目の動きがテンポについていけず、現在弾いている箇所を凝視しがちである。本来は現在弾いている音より先の音、半小節ほど先を予見しながら演奏することが望ましいが、初心者には余裕がない場合が多い。旋律が終わった後、休符がある場合は、その時間は「音を鳴らさない時間ではなく、次の音を準備するための時間である」と諭し、講師が生徒の手を持って移動させ、タイミングを体感してもらおうと、どのくらいの速さとタイミングで手のポジションを変えねばならないかの理解に役立った。

4) 特殊なリズムの習得。

2つもしくは3つの音がスラーで繋がれていて、スラーの最後の音にスタッカートがついているリズムの奏法（例：バイエル 97 番）の習得には、まずそのリズムを正確に歌えるようにすること、特にスタッカートを正確に歌うように指導し、次に、生徒の手の上や膝の上で講師がそのリズムを弾くことで、重さを感じる音と力を抜く音があることを体感させる。

5) 指使いを書くこと。

旋律が8分音符で数小節続く場合、(例: バイエル 75 番) 1音ずつ目で追っていったのでは、左手の伴奏とかみ合わなかったり、途中で止まってしまったりする生徒が多くいた。その場合は、ゆっくり旋律を音名で歌いながら生徒に自分で指番号を音符の上にかかせたうえで、弾いてみると一度で効果が表れた。また同じように左手にも指番号を書き、右手と左手の指番号が同じ所は○で囲むなど強調させると、両手で一通り弾くことが可能になる生徒が多かった。

6) 指番号や音名、習得するためのチェックマークは自分で書き込むこと。間違えた音や、見落としの#、bの記号、休符の認識、指番号など、講師が素早く楽譜にチェックを入れてしまうことが多々あるが、そうすると生徒はそれを自身で確認する前にチェックが入るので、認識度が低いと感じられることが多く、そのため同じ間違いを何度も繰り返す傾向にある。「自分の楽譜には何を書いてもかまわないから、一目でそれとわかるように自分で加筆していくように」と指導する。

次に、個別の指導例を取り上げて紹介する。

実践⑤

大教1年生 ピアノ初心者の数 3人 短教1年生 ピアノ初心者の数 2人

・大教Aさん

小学校低学年に2年間ピアノを習っていた。最初の2回のレッスンで明らかに習得率が遅いことに気が付く。他の生徒が4、5曲合格する中で、2回目で1曲合格、3回目で1曲合格というペースであった。ただ、本人独自の音楽性が有り、静かな時間がゆったり流れている中で曲によく耳を傾けている様子が伺えたので、そのことを褒め、兎に角コツコツ毎日ピアノに向かうことの重要性を説いた。6回目でやっと66番合格。あと7回で13曲残る。ハノンの2オクターブの音階練習、ドミファソラソファミから1音ずつ上がっていくという曲を合格してからも平行してずっと弾かせていた。最初はスピードが出なかったが4分音符で1回通り、次は8分音符で繰り返し、慣れてくると途中リズムも変えて符点のタッカタッカのリズムも加えると、だんだん指の動きが機敏になり、ポジション取りが上手く出来るようになっていった。調が新しくなる毎に左手の分散している音を必ず和音で弾かせてコードを確認してから元の音に戻した。本人の地道な努力で14回目の授業でバイエル終了。

・大教Bさん

小学校3年生までピアノを習っていた。読譜はできるが、指先が弱く、音も小さく粒を揃えて弾くことが難しい。よってリズムが崩れやすくテンポが安定しない。そこでまず、鍵盤と身体の接点である指先の第1関節の大切さを説明して、そこが反らないように意識して支えて弾く、また自分の音が揃う速度でまずゆっくり間違わずに弾けることを目標に練習してから、少しずつ正規のテンポになるように速めていくように指導した。速めてみてつまづくようなら、すぐに速度を落としてみる、という繰り返しの練習をさせた。84番や97番の3度の和音の音階を繋げて弾くことが難しかったので、指先で鍵盤を常に押し続けながら弾くように指導した。フォルテの部分は第1関節の所に力を込めるようにと促すと、少しずつ強弱の差も出るようになっていった。1回欠席、14回目でバイエル終了。

・大教Cさん

ピアノを弾くのは初めて。まずピアノに座る姿勢から指導。リラックスして手を体の横にぶらんと

させると指は結構半円型に曲がっており、その形のまま鍵盤にそっと乗せる、という所から始めた。まず、左も右もドレミファソの所に手を置いてポジションを定め、指使いを頼りに弾き始めていった。それから左手の伴奏形をハ長調ドミソ、シレソ、ドファラのポジションを徹底的に練習させた。音というより、手の形が「まっすぐ」(ドミソ)か「左寄り」(シレソ)か「右寄り」(ドファラ)か、の3種類のパターンで覚えさせると調が変わってもわりとスムーズに自然に手が行くように思われた。さらに進んでセブンスが出てくると「隣同士の右寄り」(シファソ)「パッと開くセブンス」(ソシファ、ソレファ)と表現を決めた。バイエルの段階では手の形の種類はそれしか出てこないと分かったと、頭の中の混乱を回避出来たように感じられた。後半の曲に時間がかかったが、1回欠席、14回目でバイエル終了。

・短教Dさん

小学校2年生までの2年間ピアノを習っていた。読譜が苦手ではほとんど読めなかった。音の隔たりの度数を説明し、2度は隣同士なので間と線の所になり、3度は一つ飛ばしなので間と間、あるいは線と線の所に音符がある関係と説明した。メロディも伴奏も隣同士の音の関係をよく見て、単音はどれだけ上がっているか、下がっているか、和音は一緒に音をまず探し、その音を中心に周り音を探るように指導した。形式についても、バイエルの場合は、大体がABAになっており、最初のAが習得出来たら、最後のAが出来たことになるので、練習時間の節約になることも教えて、部分練習をするように促した。和音のつかみ方も基本三和音の3種類と、例外的なもの、とに分けさせ、色や印で自分なりに一目見て分かるように書き加えた。72番の伴奏で和音を2音と1音を下から上へ滑らかにレガートで弾くことに苦労した。音と音が切れないように常に指先を支えながら前の音を次の音が鳴っても置いておくような感覚で弾くように指導した。その反面89番の上から下への形の方が弾きやすいようであった。なかなか軌道に乗らなかったが兎に角諦めずに・・・と励まし続け、10回目で80番台になり、その後の曲は速度は満足のものには達しなかったが14回目でバイエル終了。1回欠席。

・短教Fさん

小学校3年生までピアノを習っていた。高3の終わりからまた再開していた。導入部分は難なく進んだが、9回目のレッスンで90番台に入ったあたりから、速く弾きすぎて、ミスが目立つようになってきた。94番や96番、101番の右手の16分音符を何度も同じところでつまって弾きなおす。そこで、1音弾いた後、次の音を打鍵する際に、鍵盤の内側を感じながらゆっくり上げる、というトレーニングをさせた。1フレーズ弾くのにかなり時間がかかるが、どこかのフレーズを1日1つ、例えば96番13～16小節目と決めて実践させた。だんだんゆっくり練習することの大切さと仕上がりの早さを実感するようになっていった。14回目でバイエル終了。

実践⑥

大教1年生 ピアノ初心者的人数 2人 短教1年生 ピアノ初心者的人数 4人

・大教Aさん

合格後、授業が開始するまでに自分でバイエルの80番まで弾いていたが、授業ではバイエルを最初から取り組んだ。10回目の授業でバイエル終了、ブルグミュラーの2番、10番終了。試験はバイ

エルで受けた。理解が大変速く、楽譜も自力で読める。表現や音楽的に（感情をこめて）弾くことも指導してみたが、授業のその場ではできてもまだ楽譜通りに弾くので精いっぱいというところだった。自宅にあるのが電子ピアノだったのでタッチが浅く、その感覚を良くするために学校のアコースティックピアノで練習する機会を増やすよう指導した。鍵盤のドレミファソに 12345 の指をそれぞれ置いて、良い形を保ったまま上から指導者が手を重ねて圧力をかけてもつぶれないようにさせ、腕の重みを使って指先が鍵盤に吸い付くように圧力をかけることで音がしっかり出ることを実感させた。しっかり音を出そうとしすぎて腕や体に力が入り、乱暴なタッチにならないよう留意させた。

・大教 B さん

小学生の時に 2～3 年習ったことがあり、大学合格後、授業が開始するまでに自主的に練習していた。13 回目の授業でバイエル終了。リズムの説明では、ピアノを弾かずに膝の上などで左手は基本の拍（4 分の○拍子なら 4 分音符、8 分の○拍子なら 8 分音符）を打たせて右手は曲に出てくるリズム（付点 4 分音符と 8 分音符の組み合わせなど）の練習をさせることで音符の長さを数える方法を体感させた。両手で異なるリズムを打つことができない場合は、手拍子などでクリアしたいリズムを打たせ、指導者が基本の拍を打つ、またその逆をやる、といったようにゲーム感覚でリズム感が身につくようにすると理解しやすいようだった。

・短教 C さん

ピアノを習うのは初めて。13 回目の授業でバイエル終了。ト音記号は読めるがヘ音記号を読むのが苦手なので、ヘ音記号のみの楽譜⁽³⁾を使って指導した。まず①第 2 間からのドレミファソのみ、②順番を変えて、③ドミソ、シレファと間の音のみ、線の音のみで、という手順で、数えなくても読めるようになることを目指した。慣れたら楽譜を使い、指導者が手拍子で拍子を取りだんだん速くすることで読むスピードを上げさせるようにした。音名は楽譜に書いても良いが、100%書くことにならないように（同じ音が近くにある場合、隣の音、繰り返すフレーズ、はなるべく書かない、鉛筆で書いて弾けるようになったら消す等）と言っておくと、原則は本人に任せた。

・短教 D さん

小学生の時に 3～4 年習っていた。部活でパーカッションの経験があり、リズムが良く読める。9 回目の授業でバイエル終了、ブルグミュラーの 1, 2 番終了。試験はバイエルで受けた。気持ちを込めて歌う方法を楽曲分析の方向から指導。音が高く、長くなるほど気持ちの圧力も高まることから実際にフレーズを声に出して歌ってみせたり一緒に歌ってみたりしたが、羞恥心のほうが勝ってしまい思った通りに表現するにはまだ慣れが必要だった。

・短教 E さん

ピアノを習うのは初めて。14 回目の授業でバイエル終了。ト音記号の音符さえも読むのが苦手、特に高い加線の音を読むのに苦労していたので、前述の C さんと同様にソラシドレで楽譜も使いながら練習させたところ、理解が深まり次第に譜読みに慣れることができた。譜読みに少し時間がかかるので、80, 81 番あたりを弾きながら同時期に試験曲を練習させた。105 番の 15 小節目の半音階の指番号を楽譜の通りにせず、白鍵は 1, 黒鍵は 3, シド, ミファなど間に黒鍵のないところは 2 の指で弾かせると、ほかの曲で半音階を弾く際に応用できる。

・短教 F さん

ピアノを習うのは初めて。14 回目の授業でバイエル終了。楽譜はほとんど読めず、指が動きにくいので、できるだけ毎日一定の時間を取って練習することの大切さと、練習の方法から説明した。音符の高さや長さはその都度説明し、両手で弾けそうなところは両手で練習を始め、弾けないところは 2～4 小節に分けて片手ずつ複数回練習する。両手で弾いてみて、特に弾きにくい所、間違える所のみを 3 回から 5 回連続で一度も間違えないように弾けるまで弾きこむ。4～8 小節を止まらずに両手で弾けるまで、そして全体を 1 度も止まらずに弾くことを目標とした。左手の伴奏部分が同じコードが繰り返し出てくる所は例えば C コードなら○、G コードなら△、F コードなら□といった単純な記号で書き分け、1 つずつの音ではなく、かたまりで弾くことを意識させた。次回の課題を必ず一緒に片手ずつで良いから譜読みをして、楽譜がわからないから練習できないという事態を防いだ。55 番の右手はドレミファソしかないので 12345 の指を鍵盤上に固定させて弾くようにする。60 番も左右のラシドレミとドレミファソの指番号を固定して弾くように指導する。78 番の 16 小節目のレは全て 2 の指で弾かせる。指使いはなるべく楽譜通りにとっておくが、よほどのことがない限りは本人の弾きやすい指で弾かせる。97 番は 7、8 小節目を A、23、24 小節目を B として交互にそこだけを何度も弾かせ、混同を防いだ。97 番の 1、2 小節目の 3 度の和音のつながりが弾きにくいようなので、「ペンキをべったりミファソ、ソファミ、と塗るように」というとしっかり弾きやすいようだった。

実践⑦

大教 1 年生 ピアノ初心者的人数 3 人

短教 1 年生 ピアノ初心者的人数 3 人

・A さん

ピアノを習うのは初めて。10 回目の授業で終了、ブルグミュラーの 1 番、2 番終了。まったくの初めてだったけれど理解が大変早く、毎週の授業によく練習して臨んでいたため安定して課題曲を仕上げることが出来た。曲のクライマックスで半音階が 4 拍つづくところ、半音階は鍵盤の狭い幅を弾いていかなければいけないので苦労していた。指を 1 本ずつ独立させ明確に動かす練習、指番号を声に出して言いながらの練習、後ろから指替えのタイミングで切りながら少しずつつなげ、弾ける長さを増やしていく練習を取り入れた。

・大教 B さん

ピアノを習うのは初めて。バイエル未終了。試験曲は課題数の半分しか引いていなかったが、試験の雰囲気をつかむため前向きな気持ちをもって受験した。ピアノを弾くことに相当のストレスがあったようで、音を出すまでにかかなりの時間がかかった。間違いをその場で受け入れて直すことができにくかった。それでも授業を進めるごとに音読みの速度と正確さは格段に上がり、それを褒めると本人も成長の実感があるようだった。15 回の授業中 3 回の欠席があったことと、無理せずゆっくり本人のペースで力をつけることで納得して再履修となった。

・大教 C さん

小学校 3～6 年までの 3 年間習ったことがある。ト音記号は読めるがヘ音記号には苦手意識があった。12 回目の授業で終了。指と一緒にタテに頭が動いてしまうので、どっしりと構えて体の軸がぶれないように指導した。音楽にのっていることはとても好ましかったが、動きは時に邪魔をして音楽も

ワンパターンになってしまうので注意したい。前打音では音同士がくっついてしまいがちだったので指先を使って鍵盤に鋭角に接するよう指導した。

・短教 D さん

保育園から小学校 2 年までの 4 年間習ったことがあり時間はかかるが音読みはできる。11 回目の授業で終了。はじめて両手に 1 オクターブの音階が出てくる曲では、まず導入として左右の指番号を確認してから同じドの音に 1 の指を置き 12312345 と進め、(5)4321321 と帰ってくるよう指導した。3 回くらい反復したころには指使いに慣れて、音階って難しそうという先入観が消えていたようだった。

・短教 E さん

小学校 1～3 年の間、2 年間習ったことがある。8 回目の授業で終了。ブルグミュラー 1 番、2 番、3 番終了。最初、音を一つ一つ数えて読んでいたので五線を利用して読むこと、前の音から読むことを指導すると譜読み速度に改善が見られた。ただ、音符と休符の種類を完全には習得しておらず、リズムを読み間違えていることが度々あった。こちらから間違いを指摘せず、拍子を再確認させカウントする中で弾いてもらい、拍子が合わなくなるところで疑問を持つ感覚を大切に指導した。全音符など長い音符を細かく分けて、1 拍の単位を揃えたと理解しやすいようだった。リズムについて、間違いを自分で発見するにはどうすればいいかと質問を受けたので、まずは音をつけずにリズムを眺めること、音符に変化のあるところは先に理解しておくことを勧めた。授業内で時間のある時には次の曲の予習として何ヶ所か取り出し、リズムを先読みするようにすると、翌週には安定して弾けていた。

・短教 F さん

小学校 3 年～6 年の間、2 年間習ったことがある。へ音記号の音読みが苦手意識があった。10 回目の授業で終了。電子ピアノで練習していたからか、鍵盤の浅いところで心細そうに弾いていた。ピアノの楽器の構造は鍵盤と連動しているハンマーで弦を打って音を出す、ということの説明し、鍵盤の底を感じてしっかりした音で練習するよう指導した。授業が進むにつれ自主的に良い音で弾こうとする姿勢が見られ、弾けるようになることへの自信も出てきたようだった。右手にオクターブのポジションの跳躍があり、その間左手は分散和音で止まらず動くという曲で、片手ずつ音を探すため準備に時間がかかり、流れが止まってしまうことに苦勞していた。まずは左手をブロックコード（和音）に置き換え、右手の跳躍に慣れるようにし、両手とも音に変化するときには両手同時に幅のポジション移動の感覚をつかむよう指導した。元々の本人の努力がありすぐにコツをつかみ、2 小節、3 小節とつながっていけることを喜んでいて、分散和音をブロックコードに置き換えることで曲の大まかな流れもつかみやすくなる。ブロックコード⇔分散和音のいろいろなパターンを知っておけば、この基礎の教科から発展する弾き歌いの授業にもいろいろなアイデアをもって臨むことができる。

IV 考察

7 名の担当教員による実践報告から、指導法の内容・工夫を整理して記述する。

まず、全員が多く時間を費やしている読譜に対する指導について記述する。読譜力とは、第 1 には、楽譜に示された各音を、声または音に変える能力を言う。第 2 には、楽譜に示された各音から、その音楽の持つ音楽性を感じ取り、表現に結び付ける能力を言う⁽⁴⁾。今回問題としている読譜力は

前者である。ピアノ初心者は、五線譜表記の楽譜が読めない、あるいは読み辛い状態であり、このことがピアノの前に座り練習する回数を少なくしている一因と考える。音名である「ドレミファソラシド」を知識として知っていても、それが五線譜楽譜の位置と結びついておらず、更に五線譜の楽譜を見た時に音は読めても、その音符と実際のピアノ鍵盤の位置を一致させることが、初心者にとって慣れない作業となり困難である。3名の教員は最初に覚える音符（場所）を複数個指定し、そこから他の音を判断するという指導している。低音部譜表（へ音譜表）が読めない、あるいは読み辛い学生に対する指導の工夫を実施している教員が2名である。学生にとって五線譜楽譜の音符より格段に理解しやすい、カタカナ音名「ドレミファソラシド」を楽譜に書き込む方法を第1に指導している教員はおらず、あくまで五線譜楽譜本来の図形としての音の位置把握を目指している。しかし現実には二次的方法として、カタカナ音名の書き込みを否定せず、併用している教員がほとんどであると考えられる。文字の読めない乳幼児とは異なり、日本語をほぼ完全に把握している大人としての学生にとって、カタカナ音名のある程度の書き込みは演奏上の不安の軽減となりうるからである。この五線譜読譜についての悩ましい問題を、授業の最初の段階で、或いは何度も繰り返して丁寧に指導することは、授業の進捗にも大きく影響すると考えられる。全教員が多く時間を費やして指導している所以である。

また、音符・拍子・リズム・音程など音楽的基礎知識、いわゆる「楽典」の説明は実際の演奏するにあたっては必須で、全員が様々な形で実施している。やはりこれも音楽の内容としての読譜である。特に拍子とリズムを理解して演奏することが難しく、理論の説明だけではなく手拍子や声を出すなど様々な工夫をしている。初心者の教科書である「バイエルピアノ教則本」は右手がメロディー、左手が伴奏である形態の曲が多いが、左手の伴奏は主要三和音による分散和音で、パターン化された同じ音・音形の繰り返しが多く存在する。この左手を和音（コード）の種類別に○△□などの記号に置き換え、視覚による情報を簡略化し、演奏を容易にする方法を指導する教員が5名である。左右同時に別々の音を、別々の動きで演奏することは初心者にとって困難である。そのため、どちらか一方を「楽譜上の音」ではなく「パターン化された手の動き」としてとらえ、1音1音読譜しない方法をとることにより、右手のメロディにある程度意識を集中できる。ここで左手の和音のそれぞれの手の形に着目し、効果的な言葉掛けを行いながらイメージを持たせるなどの指導する教員もいる。これらの方法は「弾き歌いと伴奏法」授業内容の1つである、コード伴奏法ともつながり有用であると考えられる。

音楽は止まらずに演奏することが必要で、そのための練習法の記述も3名の教員からある。特に指番号を音型に当てはめて音読しながら（声に出して歌いながら）片手で練習する方法や、具体的な左右の練習内容・回数・テンポなど様々な方法が紹介されている。実際の演奏指導としては、読譜やリズムの理解ができて「手」の問題で弾けないことも多く、「手の形」指導は各教員の実践報告の中で随時現れる。左右の手それぞれ別々の動きをすることの困難さは、並大抵ではなく、教員それぞれの言葉かけや方法がある。

V 今後の課題

近年読譜力に問題のある学生が増え、実際は「耳からの聞き取り」で演奏していく学生も多い。しかし彼らの表現力が低いわけではなく、最初の基礎授業で躓かせることはできない。ピアノ初心者指

導において重要なことは、学生が練習を続ける気持ちを維持することであると考え。そこをクリアすれば、進度は遅くとも単位取得ができ資格取得につながる。各実践報告を検証しわかったことは、成人初心者にとってピアノ演奏・五線譜の読譜がいかに大変であるかということである。ピアノの演奏には、聴く・見る・指を動かす・場所を考える・音を考えるなど、同時に最低5つ以上の能力が求められ、知らず知らず間違っている個所も多い。そのため楽譜の理論理解できたところで実際演奏はできないことが多く壁に当たるが多々ある。授業でのレッスンを受けて、個人練習だけで進めることは不可能である。そこで個人レッスン指導をする教員の役割が重要となる。教員が「できて当然」「知っていて当たり前」の感覚を持つことなく、個々の学生にとって最上の方法を模索しながら、1つ1つの課題達成を目指し丁寧に進めることが必要である。褒めることも大切であり、教員とのコミュニケーションは非常に重要であると考え。今後もどのような指導方法が適当であるか研究していきたいと思う。

注・引用文献

- (1) 和田垣究・生地加代・藤谷智子・澤田和夫「幼稚園教諭・保育士に求められるピアノ技能について―園長への調査結果に基づいて―」『学校教育センター年報』第3号, 2018, p.177
- (2) 山本敬子「幼稚園教諭に必要な「動きの音楽」の表現―ピアノ初心者が取り組む演奏法―」『大阪千代田短期大学紀要』第46号, 2017, p.126
- (3) 成田 剛『ゆめのミュージック・トレイン ソルフエージュ(2)』音楽の友社, 2005, p.75
- (4) 全国大学音楽教育学会編『幼児音楽教育ハンドブック』音楽之友社, 2001, p.96